捨て犬少女に誓いのキスを
愛枝直
挿絵／A.S.ヘルメス
立ち読み版

登場人物紹介

The characters

ニコ

堅悟たちの父・悠堅から派遣されたスレイブ。ジェイミーたちから堅悟たちを守るために戦う。

高崎堅悟

家族を捨てた父を憎んでいる少年。姉に対して普通の姉弟以上の感情を抱いている。

ジェイミー
組織「ラボラトリ」に所属する研究員。加虐的な性格で、『鍵』を探している。
サンゴ
ジェイミーに付き従うスレイブ。触手を使役する能力を持っている。
高崎悠里
堅悟の姉。「スレイブ」の素質を持っていたため、ジェイミーに狙われる。

悠里は無意識のうちに頬を羞恥に火照らせた。我が物顔で蠢く肉凶器たちが、淫らな目的のもとに生まれたものであることを、女としての本能が察したからだ。

縺れそうになる脚でリビングの中に駆け込む。バンと音が鳴るほど勢いよくドアを閉めて、震える手でノブを押さえつけた。しかし――。

「いっいやっ！」

悠里は悲鳴を上げて手を放し、尻餅をつくことになる。

木目調のドアの下端から、電気ケーブルほどの生白い触手が忍び込み、手足に絡みつこうとしたからだ。

細引きの触手は目的を変えてノブに張りつき、器用に引き下ろす。ゆっくりと開いたドアの向こうから、少女が感情のうかがえない瞳で悠里を見つめていた。

『マスター』が土足で框を上がり、少女がそれに続く。

「あ……あ……っ」

カタカタと歯を鳴らしながら立ち上がる。向かう先はキッチンだ。作りかけのロールキャベツ、出しっ放しのまな板に包丁。見向きもせずに勝手口に向かう。ノブを回す。開かない。ぶれる指で鍵に手をかける。回らない。再びノブを回そうとする。開かない。開かない。開かない！

ガチャガチャと無様な金属音を立てる悠里の背後には、すでに無数の〝悪意〟が迫っていた。

ぬるり――と右の足首に吸盤付きの触手が絡みつく。
「ひっ⁉　きゃぁあっ！」
そのまま恐ろしいほどの力で引き倒された。ドアノブにかかっていた指がほどける。フローリングに手を突っ張る余裕すらなかった。床に擦れたエプロンが、捲れ返ってすっぽ抜ける。倒れた女体はずるずると手繰り寄せられ――悠里は招かれざる客の足下にひれ伏すこととなった。
「ばかねぇ。二度鍵を廻した時から、この家は私の領域となったの。持たざる者は入ることも、出ることも出来ない。サンゴ、見せてあげなさい」
「はい、マスター」
命を受けて少女がリビング中央に鎮座したソファーに触手を絡みつかせる。掃除の時には半ば引き摺って動かす大きな家具が軽々と持ち上がり、南に面した大きな窓に投げつけられた。
「っ⁉　……？」
悠里は慌てて目をつぶる。耳に飛び込んできたのはガシャンという破砕音ではなく、ドスンと重い衝突音。おそるおそる目を開ける。長椅子はひっくり返って窓際に落ち、ガラス戸には傷一つ付いていなかった。
「ご理解頂けたかしら？　ここが、異界であることが、察しの悪い、牝豚にも」
見下ろす支配者が言葉を句切って、勝ち誇るように言い含めた。

立て続けの異常事態に、もはや返す言葉もない。だが――混乱しきりの悠里は、なおも陵辱に晒されることとなる。

「だから、貴女がどれだけ泣いて叫んでよがっても、だぁれも助けてはくれないの。一匹、例外がいるけどね」

「いっ……いや……いやぁあああああああっ!!」

ずるり――と。鎌首をもたげた幾本もの触手が、悠里を脅かすように眼前で蠢いていた。

☆

「あっ、やだ、やだぁっ」

細い足首からむっちりとした太股に向けて、吸盤の触手が螺旋を描いて這い上る。慌てて上体を起こし、スカートがめくれるのも構わず両手で掴む。

しかし、肉厚の魔手は指が廻らないほど太く、その上表面が生魚のようにぬめっているため、とても非力な悠里に引き剥がせる代物ではない。

碌(ろく)な対処も出来ぬうちに、また別の触手が二本、ぐちゅりと両手に絡みつく。

「やっ、あうぅうっ!?」

二重三重にも手首に巻きついた肉蛇が、細腕を万歳の形に掲げさせた。右手のモノなどは頭頂部から広がる細身の触手を指の間に這い回らせてまでいる。

ワンピースとカーディガンの隙間に更に別の触手が潜り込む。ミミズのように節の付いた身が、開いた右脇をなぞり、うなじにねちゃりと触り、鎖骨を粘液で穢(けが)しながら、豊か

な胸の谷間に割り入る。
　しっとりときめ細かなもち肌に、触腕の体表から分泌される粘液がじくじくとなすりつけられた。
　その肌が粟立つような湿った感触に、強烈な恐怖がこみ上げる。堪えきれず悠里は、ぽろりと一筋涙を零した。
「ぷっ……ちょっとぉ、まだ何もしてないじゃない」
　その泣き顔を見て、謎の女は嘲笑を浮かべた。命を受けて手を下す少女は、変わらぬ無表情であった。
　意思のうかがえない静かな瞳のままで、少女は肉道具を操る。的確に残酷に悠里を追い詰めていく。
　いつの間にか触手は左の足にも絡みついている。無理矢理に開かれた両足の間に、また新たな触手たちが割り入ってくる。
　一本は先ほどドアを開いた細引き触手。豊麗な腰元をざわざわと撫でてショーツを持ち上げる。そして、たっぷりと肉の詰まった桃尻に食い込んで伸びた布地に、もう一方の牙を生やした口付きのモノが食らいついた。
「あっ……あ、だめぇ……っ！」
　パツンと頼りなく腰肌を叩いて、女の鎧が千切られたのが分かった。
　二組の触手は更に肌を上がり、同様の手順でブラを裁断する。支えをなくした柔乳が、

キャミソールの中でたぷんと重力に引かれて位置を下げた。
切断された上下の肌着は、ワンピースの裾から抜き取られ、放り捨てられる。
「だっさい下着」
飾り気のない白の下着を、金髪の美女は鼻で嗤った。
悠里の頬がかぁっと染まる。育ちすぎた胸を包めるブラは、手頃な値段ではなかなか見つからない。遠回しにコンプレックスを突かれて、たまらない恥ずかしさがこみ上げる。
恐怖と羞恥、そして混乱。極限の危機に晒され、視界が色を失い歪んでいく。全身が強張ってカタカタと震え、身も心も刻一刻と消耗していく。
「あぅう……うぁ!? やっ……いやっ」
巣に捕らえた蝶を蜘蛛が弄ぶように、服の下に潜り込んだ触手たちが白肌をねぶり始めた。
片足に絡んだ吸盤が、まるでキスでもするように吸いついては離れる。もう片足はぞりぞりと柔毛でこそがれる。脇下から忍び込んだミミズ触手が、すかさず左の下乳に潜り込んで巻きつき、ごねごねと豊果の付け根を揉みしだき始める。
「ひんっ……ぁひぁっ。あぅ、ぅううっ……」
また一本肩口からハケのような先端を持つ触手が忍び込み、とぐろを巻いて胴に巻きついてはくびれた脇腹をはき出す。あるいはスカートの裾を分け入った、人の舌のような器官を持つ個体が股ぐらをくぐって背筋に取り憑き、べたべたと分泌液をなすりつける。

清楚な白のワンピースの下で、無数の触手たちが我が物顔で女体を嬲り回す。服地が不気味に盛り上げられて、もこもこと歪に蠢く様が、悠里の柔肌が受ける陵侮の激しさを物語っていた。

ねぢっ、にぢっ、と、水音が立つほど、触手たちは多量の分泌液を体表から染み出させる。それを吸った悠里の服は見る間に濡れそぼち、かろうじて保たれていた肌を隠す役割すら失っていく。重たく貼りついた純白の向こうに、肌の色と毒々しい触手の表皮が透けて見える様は、いっそ全裸よりも卑猥であった。

異形の生物に、絶え間なく若肌を揉み捏ねられて、急速に全身が虚脱していく。思考がぼやけて恐怖が薄れ、代わって身体の芯から妖しげな熱がこんこんとわき出す。

ぬるつく肌がぴりぴりと痺れる。ヒクンヒクンと節々が不随意に跳ねる。未知の震えは粘液を塗り込まれる一擦りごとに強くなっていった。

「あぅっ、ぅううンっ……っは……ダメよ……こんなこと、しちゃダメ……っ」

恐慌と淫情の潮目にあって、悠里はつかの間の小康に息をつく。諭すように語りかける相手は、触手を操る幼気な少女であった。

「誰の許可を得て人の物に口をきいているのっ」

だが――その行動は、酷く保護者の不興を買った。

「サンゴッ」

「はい、マスター」

服の下端から侵入していた触手の一本が、胸の谷間に割り入って顔を出す。そのまま前に身体をたわめ、前合わせのボタンを弾き飛ばした。

「あっ……きゃぁあぁっ」

ぶるんっと重たげに揺れて、たわわな肉果がまろびでる。たっぷりと淫液を擦りつけられた乳肌は、淫猥にてらてらと濡れ光っていた。

「だらしない身体。まるで牛みたい」

心底の軽蔑がこもった声音に、息が詰まるほどの恥ずかしさがこみ上げる。

ふくよかにすぎる身体つきが悩みの種である悠里は言葉もない。指摘された相手がまるでモデルのようなスレンダーともなればなおさらだ。

眼前に、新たな触手が迫る。だが、両手を広げて縛められ、胸先を隠すことも出来ない。左の乳房はすでに触手が巻きついて、ぎゅむぎゅむとたわめられている。向かう先は解放の余韻にいまだふるふると揺れる右の豊球であった。

開く寸前の花芽のような、ぷっくりと膨れた先端が緩慢に近づく。いやいやと首を振れば、柔らかな果実はそれだけでぷるんと震える。

「なぁに？　下品に揺らして。誘ってるつもり？」

「ちっ、ちが……あぁっ⁉」

縛められた悠里を更に、女は言葉で追い詰め萎縮させていく。何をしても馬鹿にされそうで、身じろぎ一つ出来なくなっていく。

乳肌の揺れが治まるまで悠然と待ち――触手はがばりと四つに割れて開く。
真っ赤な内粘膜が覗いたのもつかの間、異形の顎は実りに実った水蜜桃にかぶりついた。
「ひぁあああっ!?　だめぇ！　吸っちゃダメよぉ！」
根元までも一呑みにして、じゅるじゅると卑猥な水音を立て触手が柔桃をしゃぶりたてる。
「あうぅん、ぁふぁ、ダメですったらぁ……ぁあんっ」
器官の内部には無数の肉舌が生えていた。乳肌の隅から隅までが執拗に舐め回される。
それは乙女の突端も同様で、とりわけざらつきの強いべろが、いつの間にか硬く痼(しこ)っていた可愛らしい桜色をねりねりと虐め嬲(なぶ)った。
感受の天秤は、一気に淫楽に傾く。
母性の証を弄ばれて、ふしだらな電流が絶え間なく生じては下腹に向かって流れ込んでいく。
きゅんきゅんと臍下が跳ねて内腿が震え、くびれた腰が悩ましくうねる。
どくどくと早鐘を打つ心臓に当てられ、半開きの口からはぁはぁと熱い吐息が零れ出る。
白磁の頬が朱に染まり、潤んだ瞳がとろりと緩む。
「もう感じてる。さすがは生まれ持っての変態女ね」
意地の悪い金髪の女がそれを見逃すはずもない。
蔑みきった調子でかけられた声に、頬の赤らみは耳にまで広がった。

「わ、わたしそんなのじゃ、……っはぅん……どぉして、こんな……ぁひぃんっ」
震える声で問う悠里だが、その言葉は半ばで途切れる。先んじてパン生地のように捏ねられていた左胸の突起にも、脂肪吸引キャップのような責め具が取り憑いたのだ。
「高崎悠堅は裏切りの後、〝スレイブ〟をここに向かうよう仕向けたわ。家族への報復を恐れたのね。でも、その判断は誤り。そんなくだらない憂さ晴らしに使うリソースはないのだけれど、〝ニコ〟は別。なんとしてでも回収しなくちゃならない」
両胸の性感帯へくちゅくちゅと粘っこい愛撫を受け、ひんひんとはしたない声が漏れる。見下ろす女はにやにやと嗤いながら、相変わらずの理解させる気のない説明を行う。
「所詮はあいつも人の子ね。余計な一手でやぶ蛇つついて愛する家族が大ピンチってわけ。貴女が適合者だったのは想定外よ。鍵は一本しかないから貴女に使うわけにはいかないけれど、契約寸前まで躾けておけば、いい取引材料になるわ」
その間にも配下の少女は身体中に絡めた肉縄で、得体の知れない粘液を擦り込んでいく。張り詰めた牝肌がむちむちとたわめられる。もはや淫熱は骨の髄を伝って頭に達し、思考が煮えて曖昧になる。それでも——生きたクリップとでもいうような、細身の触手が両足の付け根目指して一直線に忍び込んでくれば、淫らな恐怖を覚えずにはいられなかった。
「もっとも——そんなのは全部後付けの理由。本当のことを言えばね」
悠里の意識は送り込まれる紐触手に釘付けとなり、女の言葉を碌に聞いていない。
「あっ……あっ……いやっ……いやよぉっ」

目を見開いてふるふるとかぶりを振る。
濡れたスカートに血管のようにのたうつラインが浮き立っている。腰も腿もがっしりと肉厚の触手が巻きつき、逃れるどころか身じろぎも出来ない。その終点が股ぐらに達し――。
「私が貴女を犯すのはね。単なる暇つぶしよ」
「ひぃいいいいいンっ♡」
牝園の中心に、強烈な刺激が駆け抜けた。
「つっ……摘まれてるぅ……わたしの大事なとこ摘まれてるぅっ。いやぁああン！　そんなにコリコリしちゃダメッ、ダメよぉおっ！」
目が付いているかのような正確さで、触手は悠里のクリトリスに取り憑いた。
肉厚の外陰唇に頭を潜り込ませ包皮を剥き、神経の密集した快楽器官を集中的に磨き込む。
目の前がちかちかと瞬いて見えるほどの媚電に悠里は狂乱し、ビクビクと腰下を打ち震わせた。
生体クリップも例に漏れず、肌を火照らせる分泌液を垂れ流す。ただでさえ敏感な陰核が真っ赤に腫れ上がり、小指の先ほどにも膨らんで更に感度を増す。触手はその集まった血流を散らすように、きつく肉豆を挟み潰して練り捏ねる。
「ひっ♡　ひんっ♡　ひぃんっ♡　あひぃん♡　あひぃいいんっ♡　許してぇっ……おか

しくなっちゃう……おかしくなっちゃうのぉおおっ！」
もちろんその間も、胸先を嬲り、肌を揉み込む愛撫を容赦して貰えるわけではない。
こりこり、ぞりぞり、くちゅくちゅ、ぐちゅぐちゅと、果てしなく総身を責め立てられて、重たく痺れるような淫楽が下腹に溜まっていく。
おっとりと優しい美貌を歪め、歯を食いしばって耐えても、間近に迫った破滅をほんの僅か先延ばしすることのほか悠里に出来ることはない。
「なぁに？　イっちゃうの？　こんな気色の悪い触手に身体中弄り回されてイっちゃうの？」
傲然と見下ろす金髪の女が、それは楽しげに耳元で囁く。
『気色の悪い』――その形容に直接手を下す少女がぴくりと身じろぎし、肉淫具を操る動きが僅かに鈍ったことに悠里は気付けなかった。
「やっぱり牝豚じゃない、貴女」
零下の声音で突きつけられた事実に、意識が真っ白になるほどの羞恥が脳裏を焼いて――。
「ひぁぁあぁぁぁぁあぁあっ！」
半ば悲鳴のような嬌声を上げながら、ビクビクビク！　と豊満な身体を波打たせ、悠里は被虐の絶頂に舞い上がった。
ぐんと背が反り、真上を向くほどに頤（おとがい）を持ち上げる。自然、胸は突きだされ、プリンの

ような柔乳が、触手拘束を振りほどかんばかりに激しく揺れた。
　まろやかな牝腰はとりわけ激烈な反応を示し、壊れたオモチャのようにガクガクと跳ね回る。ほどなくして尿口から、ぷじゃりという水音と共に淫水が漏れて溢れ、むっちりとした太股を伝ってカーペットを濡らした。
　はひ、はひとふしだらに息をついて、アクメの余韻を追い出そうとする悠里を、金の髪の女は見下げ果てたというように嘲笑う。
「いい年してお漏らしなんて、恥ずかしくないのかしら」
「あぅ、ぅうう……っ。もぉ……もぉ許して下さい……」
　恥ずかしい事実を指摘され、悠里は瞳いっぱいに涙を溜めていやいやをした。だが、その憐れっぽい仕草も女の嗜虐をそそるだけに終わる。
「なにを甘っちょろいこと言ってるの」
　女の目配せを受けて、サンゴと呼ばれる少女がまた新たな肉凶器を悠里に突きつける。
　思わずひぃと情けない声を漏らした。
「本番はこれからじゃない」
　ごつごつと青筋の浮き立った太い幹に、ぶっくりと張り出した楕円球の傘が乗る。立派に育ったキノコをグロテスクにデフォルメしたようなその触手は、昔保健の教科書で見たことのある、男性器の形をしていた。
「いっ、いやぁああっ！　それだけは……それだけは許して下さいっ」

陶酔は欠片も残さず吹き飛び、さぁっと顔から血の気が引く。再びの恐怖にカタカタと歯が鳴る。

絹を裂くような悲鳴を上げた悠里を、手枷触手が引き倒す。束ねて絨毯に縫いつけられ、しどけなく腰を突きだした、横座りの姿勢を強いられた。

自然に閉じた足を、右側に絡みついた肉縄が膝から吊って持ち上げる。

下着はとうに剥がされている。眼前に立つ二人がほんの僅か横に廻って覗き込めば、隠す物なく女の最奥が見えてしまう格好だった。

「だ……ダメっ、ダメよぉ！　そんなこと無理よぉっ！」

「どうなの？　サンゴ」

狼狽する悠里を更に追い詰めるべく、間を置かず肉茎触手が秘園にくちゅりと押し当てられる。熟れた女体は本人の意思を裏切って、敏感に臍下を跳ねさせた。

「十分に濡れています。挿入に支障はありません」

形や感触を確かめるように、くちゅ、ちゅぐと淫器が蠢く。陰核絶頂に綻びかけた、楚々としたピンクが押し広げられ、もっちりと脂肪の乗った肉土手が左右に潰れる。

複雑に層をなした粘膜のミルフィーユは、少女の言葉通りたっぷりと蜜を溜め込んでいた。触手肉傘の一掻きごとに、愛液の飛沫が霧となって弾ける。

そのたびに望まぬ愛悦がビリビリと下腹を苛む。まるで陵辱を期待するかのように、花びらは開き癖を強めていった。

「ですってよ」
白衣の女はくすくすと可笑しげに笑って怯える悠里を見下ろす。
「あっ、あぅっ、お願いです、お願いですからぁっ」
そして――寝かせたシャフトで秘裂を擦り上げていたペニス触手が、身を起こして牝の口に突き立つ。
「待って、待っ……あぐぅうぅぅぅうぅうっ！」
媚声混じりの懇願を無視して、慈悲なき凶刃が悠里の身の内を引き裂いた。
あまりにも呆気なく理不尽な喪失に、頭の中がからっぽだった。きーんと耳鳴りがして視界がぐんにゃりと歪む。
茫然自失の悠里に構わず、触手陰茎は膣道を奥へと突き進む。無理矢理に狭肉を押し割られる痛みに、悠里は悲痛な泣き声を漏らした。
「ひぎ……ぁあぁっ！　う、動かないでっ、痛いのぉっ」
「何を大袈裟な。サンゴの媚薬液をあんなに浴びてるのに、痛いわけ……まさか貴女」
一度はその訴えを一笑に付すが、白衣の女は何かに気付いた様子で言葉を句切った。
汚げに指先でスカートの端を摘み、めくる。
「あ……ああ……っ」
そこには、淫惨な光景が広がっていた。
滑らかな下腹の形良い茂みの奥。愛らしい造りの花唇が、グロテスクに筋張った肉柱に

貫かれている。そして、痛ましくこじ開けられた清苑の端から、純潔の証が零れ落ち、赤く腿を伝っていた。

「そ、そう。初めてだったの。ぷっ……ご、ごめんなさいね。ふふ、ま、まさかその年で、そんないやらしい身体しておきながら、うふふふふ、は、初めてだなんて思わなくって……あは、あはははっ！」

眉根を寄せたしかつめらしい表情は、物の数秒と持たなかった。口先だけで謝りながら、心ない哄笑を上げる女に、心臓を鷲掴みされたような悲しみがこみ上げる。

「ねぇどんな気持ち？　その年まで大事に大事に守ってきた処女膜をバケモノのチンポモドキで破られるのってどんな気持ち？　あはははっ」

「うっ、うううっ、うぁあぁぁぁあぁっ……！」

更にはしゃいだ調子でからかわれ、悠里の中で何かが決壊する。悠里はぽろぽろと涙を零し始めた。

「そうよねぇ、処女なら仕方ないわよねぇ。サンゴ。中にもたっぷりくれてやりなさい」

「……はい、マスター」

子供のように泣きじゃくる悠里を、白衣の女は更に追い打つ。

処女路を肉槍はなおも押して進み、子宮口にこづんと穂先を到達させる。その幹が波打つようにブクリと膨らみ――。

「んひぃいっ⁉　あ、熱いのお腹に出てるぅっ！」

驚きの声がくぐもって響く。代わりにちゅくと水音が直に伝わる。
キス、されていた。重なった唇から甘酸っぱい女の子の匂いが流れ込んでくる。イクたび飲み干された、自分の味だった。
頭の芯がじんと痺れる。きゅうと胸が締めつけられる。
「……つまんねぇことときくな」
しばらく情熱的に唇をついばんだ後、ようやく彼が顔を上げる。そして、ぷいと照れたようにそっぽを向いて、ぶっきらぼうに呟いた。
やっぱり、この人はずるい。あんなにしつこく虐めたかと思えば、今度は優しくだっこして。ものすごく恥ずかしがるくせに、無理して甘いキスをして。
「うー……けんごさんのばかぁ♡」
こんなに振り回されたら、ドキドキしてしまうのが止められないじゃないか。
「なっ……バカはないだろ、バカは。だっ、だいたいっ……痛いのはもういいのかよっ」
しかも、自分では分かってなさそうなところが余計にずるい。
けんごさんはむきになって言い返した後、仕返しのようにいじわるを言う。いつの間にかわたしの腰は、ぐねぐねえっちにくねりだしていた。
「けんごさんのせいだもぉん……♡　けんごさんがドキドキさせるからぁ♡」
胸板に潰されたおっぱいを、ぎゅむぎゅむはしたなく押しつけて。顔を見上げて名前を呼んで。ご主人様に甘えるわんちゃんみたいになってしまう。

受け入れたおちんちんがくちくち擦れて、お腹の奥がじんじん痺れる。膣内のお肉もきゅうきゅう締まって、彼のモノに甘えてしまう。

元からほとんどなかった痛みは、気持ちよさに塗り潰されて、まるで感じなくなっていた。

「もうだいじょうぶですからぁ♡　けんごさん動いてぇ♡　ズンってしてぇ♡」

「忙しい奴……痛かったら言えよ？」

はしたないおねだりに呆れたように苦笑しながらやっぱり優しい気遣いを見せて、彼は両手でお尻を抱えた。

背中を少し反らしてわたしの身体を浮かせると、慎重にそっと落とす。離れた腰がまたぶつかって、おちんちんがこつんと奥を叩いた瞬間、頭が真っ白になるような快感に襲われた。

「ふぁぁあああんっ♡　あっ……あひぃ♡」

たったの一突きで、アクメの声が出てしまう。わたしは必死で彼にしがみついて、ガクガク全身を震わせた。

「うぐっ……お、おい、そんな、締めんなよっ」

「あああらってぇ♡　ちゅくかりゃぁ♡　けんごひゃんがおま○こぐちゅってひゅりゅかりゃぁあっ♡」

腰に絡めた両足も、ぷるぷる波打つぐらい力んでしまう。そうするとおま○こは余計に

締まっておちんちんをくちくちおしゃぶりしてしまう。
刺激にまいったけんごさんが焦った声で叱るけど、もう自分ではどうしようもない。膣内の動きを止めるどころか、アクメの余韻を長引かせようとお股が勝手にくねってしまう。
意地汚い腰使いに怒ったのか、彼はぐっと奥歯を噛むと、またわたしのお尻を持ち上げてどすんと降ろした。たった一回でお腹が煮えてどろどろに蕩けてしまうような子宮へのノックを、コンコン、コンコンと繰り返し始めた。
「ひぁああん♡　らめぇっ♡　いまちゅくのらめれすぅっ♡　まって、まってぇ♡」
カチカチの芯がおま○この襞をぞりぞり擦る。ぷりんと張り出した先っぽが、赤ちゃんの部屋の入口を何度も叩く。わたしは目をいっぱいに開いて、ぽろぽろ涙を零しながらアクメした。
あまりの気持ちよさに降参しても、けんごさんはおま○こいじめをやめてくれない。それどころか余計興奮したみたいに、ぐちゅぐちゅ動きを速くする。
そして彼はまた顔中を真っ赤にして恥ずかしがりながら――。
「お……お前が悪いんだからなっ！　お前がそんな……か、可愛い顔するからっ」
わたしの顔まで真っ赤になるようなことを言った。
「うわぁぁあんらめぇらめらめぇえっ♡　いま可愛いなんて言われたらおま○こきゅうってなるのとまんなくなっちゃいますぅううっ♡」
胸がどきんと高鳴って、身体は余計敏感になって、お腹がずきずきするほど疼いてしま

う。わたしはもう訳が分からなくなって、ぶんぶん首を振りながら喘ぎまくった。
イキっ放しの下のお口から出し入れのたび、エッチなお汁が掻き出される。彼のお腹までびしょびしょになって、肌がぶつかるたびぱちゅぱちゅ濡れた音が鳴る。
あまりに彼の胸板に強く縋りついていたせいで、ついには上着がずれてしまう。はみでたおっぱいが直接彼の服に擦れて、刺激の強さと恥ずかしさとで、余計に興奮してしまう。
気持ちよくて、幸せで、同じぐらい怖かった。絶対言っちゃイケナイ言葉が、喉の奥で暴れ回っていた。
「けんごひゃん……してぇ♡　はやくけーやくぅ♡　にこのこと、けんごひゃんのモノにひてくりゃひゃぁいっ♡」
だからわたしは蕩けた顔で必死に真上の彼を見上げて、とどめを刺してとおねだりをした。
「ああ……ニコ、俺の物になれ……！」
けんごさんはわたしのお尻から右手を離して鍵を取り出す。支える力が足りなくなって、わたしを赤ちゃんみたいに揺すれなくなった代わりに、腰をくいくいと突き上げてくる。
「んひぃぃいいン♡　なりますぅうっ♡　けんごひゃんのどれぇになりまひゅうぅ♡」
おま○この奥をぐにぐに揉まれる気持ちよさに、わたしはぎゅっと目をつぶる。奥歯を噛んでアクメしながら彼のスレイブになると誓う。
首元に、かちゃりと鍵の刺さる音がする。けんごさんはぐっと力強く鍵を廻しながら

――。

「ニコ、出すぞ……っああっ！」

いっしょにわたしの膣内に、勢いよく射精した。

「ひぁああぁぁぁああああっ♡　あああすごいのきちゃうぅっ♡　イクぅっ♡　おま○こイっちゃいますぅううっ♡」

首輪がほどけて炎になって、わたしたち二人を優しく包む。光のわっかが縮まるごとに、びっくりするぐらいの強い魔力が満ちてきて、頭の中は真っ白になる。

おまけにびんびんと元気良く跳ねるおちんちんは、びゅーびゅーとザーメンを流し込んで、赤ちゃんの部屋をどろどろに溶かした。

ビクンビクンとはしたなく痙攣して暴れるわたしを、けんごさんはぎゅっと抱き留めて支える。燃えるような快楽は少しずつ心地良い温かさに変わって、彼の腕の中でえっちな反応もおとなしくなっていった。

からだとこころ、両方いっしょに満たされるのが、嬉しいのに、なぜか切ない。

またぽろぽろと涙が溢れだす。こんな顔見せられないと、わたしはけんごさんの胸板におでこを押しつける。

すると彼は、真下にあったわたしのつむじに、優しく一つキスを降らせた。

「……俺は、捨てねぇよ。お前のこと」

髪の毛をさわさわと揺らして囁く。言葉は直接頭で響いて、そのまま胸の奥にすとんと

降りた。
彼のために、戦おう。この男の子を守るために、生きよう。ぎゅっと手に力を込めて縋りながら、心に誓う。
『好き』と口にはだせないけれど、きっと彼の一番にもなれないけれど、それでも全然構わない。
だってわたしはたった今から、この照れ屋で優しいご主人様――高崎堅悟のスレイブなのだから。

☆

苛々とつま先で床を叩きながら、ジェイミーは手前の扉でニコたちが出てくるのを待っていた。
そこかしこ手当たりしだいに陳列台や商品を消して灯りに変え、視界を確保してある。白衣の女は険しい瞳で封印されたドアノブを凝視する。
扉の真横には不適合スレイブを貼りつかせてある。解錠の瞬間急襲する手はずだ。
ジェイミー自身はといえば、吹き抜けを真っ直ぐに貫く飾り柱に背を寄せていた。サンゴがそのすぐそばに控える。
背後に空間がなければ飛ぶことは出来ない。銀鎚を封じるほぼ唯一の手段がこれだ。
だが、こんなものはただの気休め。あの重戦車のような娘を相手にして、足を制限される時点で詰みに等しいのだ。

出鼻の奇襲が決まるか否かに、全てがかかっている。歴戦のマスターは心中断じる。
しかし、直後ジェイミーの目論見は呆気なく崩れ去った。
ガァン――と。
強烈な破砕音を立てて扉横の壁面が砕け散った。まるで狙い澄ましたかのように、不適合スレイブの待機位置がだ。
散弾のように飛んだがれきの礫（つぶて）が怪物の横腹を強かに打ち据え、怖気を催す絶叫が響く。
「っゃぁぁあああっ！」
そして、開いた大穴から少女の気勢に満ちた声が聞こえた次の瞬間、肉の潰れる異音と共に巨体が浮き上がり、女の配下は砲弾のように飛んだ。
吹き抜けを直線的な軌道で飛ぶ不適合スレイブは二階通路の欄干を叩き壊してまだ足りず、セレクトショップのショウウィンドウを砕いて店内に突っ込む。
遅れて地響きすら伴う衝突音が階下にまで到達してジェイミーを揺らし――一瞬の静寂が降りた。
「ふわぁ……ほんとにいましたよ、扉の真横に。ご主人様っ」
暢気な声で感嘆しながら積み上がったがれきを踏み越えて、凶悪な鈍色に輝くスレッジハンマーを携えたニコが顔を出す。
膨大な魔力を消費する破城鎚を行使しながら、その手が先日のように己の血にまみれた様子はない。負荷を吸収しきるだけの魔力が供給された何よりの証拠であった。

「ごめんごめん、でも……」
少年は軽い調子で謝ると、下着の端に指をかけ、くるくると器用にニコの脚から抜き取っていった。
あっというまにびしょ濡れの秘部を丸出しにされたニコは、思わず小さな手で股間を覆うが、今度は悠里がそれを剥がしてしまう。
「ニコの口から、どうして欲しいか聞きたいな」
堅悟はにっこりと笑っておねだりを命じる。無邪気に容赦のないご主人様ぶりに胸の奥がきゅうんと疼いて、訳が分からなくなったニコは言われるがままにはしたなく足を開いた。
悠里と握りあった手をほどき、腰裏に添えて足を持ち上げる。少年の顔を見つめたままで、指先をその奥へと近づける。
あまりの羞恥に瞳の奥からじんわりと涙が溢れてくるが、なぜかその恥ずかしさにさえ興奮してしまう。ニコは衝動に駆られるまま尻たぶをくぱりと割り開き――。
「ニコのこと……ご主人様のおちんちんで愛して下さい……♡」
柔らかく伸びる窄まりをはしたなく晒してみせた。
「……ん？」「あらあら～」
堅悟と悠里が、きょとんとして顔を見合わせる。そこでようやくどうしようもない間違いを犯してしまったことに気づき、ニコはあわあわと狼狽えだした。

「あ、ああ……！　あ、あああの、こ、ここ、これは！　そ、その、ち、ちがくて！」
お尻から両手を放して顔の前でぶんぶんと振り、何とか言い訳しようとするが、巧い言葉は出てこない。
呆気にとられていたはずの堅悟はそれを見てにんまりと笑うと、「そうかそうか」などと呟きながら、服を脱ぎだした。
若々しく引き締まった細身の身体が露わになっていく。おねえちゃんが「まぁ♡」と両頬に手を当て、ニコもじぃっと目を釘付けにする。
手早く半裸になったマスターは、ためらいもせず最後の一枚に指をかける。下着を下ろすと逞しく屹立した若竿が跳ねるように持ち上がってぴたんと腹筋を叩いた。
「でも、何とか濡らさないと痛いかもな？」
「あらあらどうしましょ～」
「そ、そうですよねっしかたないですよねっ変なこと言ってごめんなさい、ですから、その、忘れて下さい～……っ」
何よりもはっきりとした興奮の証に不思議な安堵と期待を覚えたニコは、マスターの造る思案顔のわざとらしさにも気付かず、裏腹の寂しさを感じながら早口で捲し立てる。
堅悟はやはりわざとらしくふーむと唸り、なお白々しくああと手を打つ。そしてなぜか悠里の腰元に膝を寄せてむっちりとした両足を割り開き――。
「え？　け、けんごくん？　あうぅうぅうンッ！♡」

下着をずらして一息にペニスをねじ入れた。
「こうすればいいんだ。ちょっとまってろな、ニコ」
交接の快楽に少し眉根を寄せながら、堅悟がにっこりと微笑みかける。
「ひっ、ひどいわ、ひどいわぁっ♡　おねえちゃんのこと、おちんちん濡らす道具にするなんてぇえっ♡」
悠里は恨みがましげに少年を睨むが、すぐに声を上擦らせて桃色の髪を振り乱す。豊満な肢体が迫力たっぷりにたゆたゆと揺れて、ニコの目を釘付けにする。
「ごめんね、姉さん。後でたっぷりお詫びをするから」
謝りながらもご主人様は愉しそうに笑っていた。身体を倒してキスを交わすと、くびれた腰を力強く掴んで、ゆさゆさと身を前後させる。
「あぅン♡　んぅうンっ……もぉ、困った子……♡」
「ふふ、姉さんも、ニコのこと気持ちよくしてやりたいだろ？　おま○こびしゃびしゃにして手伝ってよ」
ニコをそっちのけで二人は熱いまなざしで見つめあい、どちらからともなく腰を使って愛を営む。
くちゅ、ちゅくと穏やかに水音が立ち、低くかすれながら抑えきれない艶声と重なる。指先を唇に当てて上体をくねらせる悠里の肌は、しっとりと汗に濡れていた。甘い蠱惑的な香りが立ち込め、ニコまで頭が痺れてしまう。

（ああ、いいなぁ。おねえちゃん、いいなぁ）

ニコは身を起こして禁忌の睦みあいに眺め入る。ついさっきまでは譲りあっていたのに、いざ実際に先を越されてしまうと、羨ましくてたまらない。

逞しい肉幹を美味しそうに咥え込んで、みちゅ、みちゅと捲れ返っては押し戻される肉ビラを、ふー、ふーと発情の吐息を漏らしながら凝視する。

知らぬ間に指は股間に向かい、しとどに濡れた花弁に触れる。ご主人様の指で掻き出された愛蜜をたっぷりとまぶすと、ニコは更に奥まった箇所の秘部に伸ばした。

「あぅん、んぅううン……♡」

使い慣れた菊膣は、僅かな湿り気で異物を迎え入れる。ひくひくと浅ましく閉じ開きする絞り口を指の腹でなぞると、ぴりぴりと切ない疼きが生まれた。

滑りをよくした肛環をぬるぬるとなぞりながら、螺旋を描いて押し込んでいけば、くぷくぷと容易く第一関節までが埋まる。ニコは夢中になってゴム輪のような感触を内側から押し揉む。

「あぁン♡　ごめんね、ニコちゃん、ごめんねぇっ♡」

切なげに自らを慰めるニコに悠里が謝るが、その瞳は隠しきれぬ悦びにとろりと潤み、綻びた口元から甘やかな喘ぎが絶え間なく零れる。

幸せそうな彼女の様子に余計飢餓感を煽られて、ニコは尻穴を寛げる指使いを激しくした。こんこんと愛液を吐き出す前壺から何度も湿り気を継ぎ足し継ぎ足し、中指を根元ま

で押し込め薬指に差し替え、入口の隘路(あいろ)をならすのもそこそこに二本束ねてねじ入れ、粘膜が傷つきそうなほど性急に掻き回す。

それでも自らの細い指では刺激が足りない。ニコは余った手で乱暴に乳房を鷲掴みすると、ごねごねとゴム鞠のように揉みしだく。

「ニコも、欲しい？」

「あああ、欲しいですぅ、ご主人様のおちんちん、ほしいですぅっ♡」

淫らな熱に浮かされて自制をなくし、ニコは水を向けられるがまま何度も頷き、はしたないおねだりをしてしまう。

「どこに？」

「お、お尻の穴ぁっ♡　お尻の穴をおま〇こみたいにくちゅくちゅまぜまぜしてもらうのぉっ♡」

なおもいじわるに促す堅悟へ、甘え媚びた声で返事をすると、ニコは三本目の指を菊壺に足し入れた。

ぐちゃぐちゃと水音が鳴るほどに指を蠢かせる。根元に食いついてきつく締まる括約筋が、湿り気に滑ってぬるぬるとずれるたび、もどかしい媚電が腰裏を走る。

堅悟のペニスで膣奥をねちねち押し揉まれる悠里も、もはや抑えることが出来ずにひんひんと悶え鳴いていた。発情しきった牝声に煽られて、欲求不満は際限なく高まっていく。

「あああおねえちゃんずるいですぅっ、わたしもおちんちんほしいのにぃっ♡」

ついにニコはやきもちを露わにして、だだっこのようにおねえちゃんを詰った。好意と嫉妬がない交ぜになって訳が分からなくなり、勢いよく彼女に顔を寄せると、子犬が甘噛みするように唇を貪る。

「んぅっ、っちゅ……♡　あああごめんねぇ♡　ニコちゃん、ニコちゃん♡」

ちゅくちゅくと舌を絡めて互いの唾液を混ぜあって、二人のスレイブは見つめあう。悠里の下腹ははひくん、ひくんと断続的に引きつけを起こし、いつ絶頂に達してもおかしくないほどに昂っている。

羨ましい、羨ましい、羨ましい――！

ニコの頭の中がただ一言でいっぱいになり、こみ上げる切なさに涙を零しそうになったその時――。

「あうぅぅううン⁉♡」

悠里に困惑の悶え声を上げさせて、堅悟が愛蜜にまみれた肉棒をずるりと抜いた。

（おちんちん……けんごさんのおちんちん……おねえちゃんのおつゆでべちょべちょになったけんごさんのおちんちん……っ）

びんびんと少年の下腹で跳ねる屹立に目を釘付けにして、ニコは無言でふーふーと発情の吐息を零す。

「それじゃ……ニコにもあげような」

苦笑する堅悟が、突然腋の下へ手を差し込んだ。ニコの身体は持ち上げられて、悠里に重ねて乗せられてしまった。
「ああ……おねえちゃん……」
「はふ……ン……♡　ニコちゃん……♡」
切なげなおねえちゃんの顔が目の前に来て、きゅうんと申し訳なさがこみ上げてくる。それでも少年の手が腰裏に乗り、熱い肉傘が窄まりに触れると、そんな気持ちも吹き飛んでしまう。
「ふぁああぁああンっ！♡」
「おいおい、まだ挿れてないぞ？」
「だってぇ、ちんちん♡　ちんちんがぁ♡　はやくっ♡　ちんちんはやくぅっ♡」
呆れるご主人様に、煮えきったおねだりを返して、ニコはふりふりと小尻を振り立てる。ねとねとと菊口をなぞる逞しい感触が期待を煽り、もう自分では止めることも出来ない。
欲しい、欲しい、欲しい。たっぷりいじわるにおあずけされたカチカチのおちんちんがおしりま○こに今すぐ欲しい。卑猥な言葉を頭の中でぐるぐると繰り返し、訳も分からず身をくねらせる。
「お姉ちゃん、ニコのこと捕まえててよ」
「……♡　はい♡」
落ち着きのないスレイブの小尻は、お望みのご馳走を弾いてしまう。ご主人様は困った

ように、もう一人のスレイブに助けを求めた。
嬉しげに微笑んだ悠里が暴れる身体をぎゅうと抱きしめる。たっぷりとした乳房に顔が埋まって、幸せな感触に腰振りがにわかに収まる。
堅悟はその機を逃さず、ずれた照準を再び定め――。
「はわぁあぁぁあ～～～～ッ♡」
一息に菊壺を貫いてきた。
ニコは目を見開いて頤を反らし、ぶるぶると震えながら悶え鳴いた。
ねっとりと悠里の愛液でコーティングされた陰茎は、痛みを与えず直腸をみっちりと満たす。
寛げられた肉壁から純度の高い肛悦淫楽がじんじんと広がり、ニコの全身を硬直させる。
「ひぃいいいいっ！♡　いひ……ぃ、ひぃいいいいいいいっ♡」
あんなもの、比べものにならない。絶望の中イキ狂った触手での陵辱などより、何倍かもわからないほど気持ちいい。
ニコは抱き留める悠里にきつく縋りつく。持ち上げた首を今度はたわめ、肩胛骨が浮き立つほどに上体を力ませる。
食いしばった歯の隙間から、か細い悲鳴が長く伸びる。ギクン、ギクン！　と小さな身体が痙攣し、目にも明らかな絶頂の痴態を示した。
「ッ……もうイったのか、ニコ？」

「はわ、ぁあ～……っ♡　らってぇ、ちんちんがぁ♡　ちんちんがぁ♡」
僅かに声を震わせてひやかすご主人様に、いやらしい単語を意味もなく連呼する。
堅悟は腰を引いて牡茎をずるりと抜き、粘り着く肛門を捲り返すと、再びぐちゅんと深く埋める。
「ちんちんが？」
「はひぃぃぃンッ⁉♡　ち、ちんちんっ♡　おひりがぁ、ハメハメしゅごいのぉッ♡」
腸奥を殴りつけられる衝撃に悶絶し、ニコは促されるまま支離滅裂に淫らな言葉をまき散らす。
堅悟は満足げに「そっか」とだけ呟くと、再び腰を使い始めた。
「あひっ♡　ひぃ、いいいしゅごいぃっ♡　あにゃがしゅごいぃいいっ♡」
ご主人様は肉穴を慣らそうとするように、小さく腰を引いてはぐいぐいと押し込んでを繰り返す。
張り出した亀頭にぐにぐに揉まれる腸壁から、腰骨にひしゃげられる尻たぶから、甘い悦びがじんじんとわき出し、ニコは全身をビクつかせて悶え回る。
「ああ、ニコちゃん……すごく気持ちよさそう……♡」
間近でよがり顔を見つめる悠里が、羨ましげに発情の吐息を零しながら、抱き留めた腕に力を込めてくる。
二人の肉果がぎゅむぎゅむとたわんで、乳悦までもがニコを苛む。積み増された刺激に

また一段と恍惚の高みへと押し上げられる。
「あああごめんにゃひゃいぃっ♡　けちゅあにゃちんちんきもちよくてごめんにゃひゃいいっ♡」
「謝らないで、ニコちゃんとっても可愛いわ……♡」
訳も分からず泣きそうになりながら、目の前の優しい顔を見つめていると、おねえちゃんは頬を両手で挟んでキスをしてくれた。
甘い吐息ととろとろの唾液が一緒くたに流れ込んでくる。差し込まれた舌が自分の舌にねっとり絡みついて、くちゃくちゃといやらしい水音が鳴る。
ぞわぞわと頭の芯が痺れるような気持ちよさに襲われて、身体中がびくびくと震える。自然とアナルがきゅうと狭まり、するとご主人様はいじわるにも腰の動きを大胆にする。
「んぢゅぅ、んぅううううっ♡　っぅう〜〜〜〜っ♡　んぅうぅうううううっ♡」
息もぴったりの二人がかりで濃厚に愛してもらう幸せに、ニコは悠里とキスを交わしたまま言葉もなくまたアクメを極めた。
耳の奥でざぁざぁと潮騒が鳴り、視界がぼやけて真白に染まる。
ガクビクと小尻を跳ねさせ、半ば白目を剥いて悶える間も、堅悟と悠里は変わらずニコを可愛がり続ける。
きゅうきゅうと狭まるのを無理矢理に耕される肛門性器からぞりぞりときつい刺激が走る。背筋を駆け上って脳を叩く淫楽のパルスを、悠里のキスがとろとろと温めていつまで

も留める。
永遠にも思えるほどの長いアクメにニコの瞳からぽろぽろと涙が零れ始めた。
「ぷぁ……あ〜〜〜〜っ♡　らめになりゅぅっ♡　にこきもぢよしゅぎてらめになっちゃいまひゅぅっ♡」
悠里が息継ぎに唇を離した瞬間、ニコは溜まりに溜まった淫鳴を吐き出し、舌足らずに上擦った愛らしい声音で弱音を吐く。
「もう満足？」
「やだぁ……っ♡　もっといじめてぇっ♡　にこのこといじめるのぉ……っ♡」
だが、堅悟が腰使いを緩めてねっちねっちと入口を押し伸ばしながらいじわるに尋ねると、すぐさま甘えた声でおねだりを返した。
もっと何度もイかせて欲しい。二人にずっと可愛がっていて欲しい。もうそれ以外に何も考えられず、ニコは堪え性のない腰振りダンスをまた始めだす。
「わかったわかった、ちょっと落ち着け……って！」
堅悟は苦笑しながらニコの胴に手を廻し、勢いをつけて小さな身体をひっくり返した。
尻穴の中で挿入されたままのペニスがぐにゅりと捻れて擦れ、「んひぃっ♡」とスレイブは悶え鳴く。
突然の体位変更に混乱するニコは、悠里の上にゆっくりと横たえられる。後頭部をふかふかの乳房が柔らかく受け止める。気がつくと真っ正面に愛しいご主人様の顔があった。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ

あなたはどのタイプ？

詳しくはKTCのオフィシャルサイトにて！ キルタイム 検索 Click

電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!

あなたのキモチイイをお手伝い!

キルタイムのアダルトコミック誌!

二次元ドリームマガジン

業界唯一! エロラノベ&エロコミック満載!!

コミックアンリアル

魔法、催眠、性転換…不思議Hコミック誌!

コミックプリズム

フェチをテーマにツキ抜ける作品群!!

メガミクライシス

KTCといえば闘うヒロインアンソロ!

詳しくはKTCのオフィシャルサイトにて! キルタイム 検索 Click

書店、書籍通販サイトなどで好評発売中!
※いずれも18歳未満の方は購入できません。

コミックス同人誌版も発売中!

全国の同人誌ショップ、キルタイムコミュニケーション通販にて取り扱っております。

KTC サイト http://ktcom.jp/

title:

ノブナガ繚乱!

lineup:

『明智の策略』 トキサナ

『ドSの流儀』 chaccu

『生徒会長前哨戦?』 天道まさえ

title:

発情期なアダム

lineup:

『いつもの学園生活』 天道まさえ

『天使の誘惑』 ウメ吉

『ELECTRIC LOVE』 空木次葉

電子書籍版もあります!

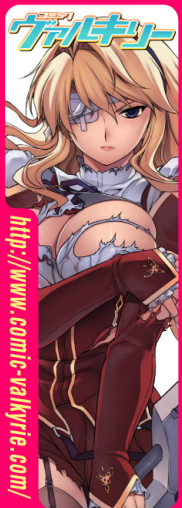
各種ダウンロードサイトにて発売中!

※18歳未満の方は購入できません。

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

http://ktcom.jp/

◎雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ!
◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルの**バックナンバー**も買えるよ!
◎**ジャンル別**で作品も選べて超便利!
◎二次元編集部の愉快な**Blog**も更新中!



KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁でではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!